

# どくどく百景

江戸東京博物館コレクションより

歌川広重  
《名所江戸百景  
浅草田圃西の町並》(部分)  
安政4(1857)年

東京ステーションギャラリー  
TOKYO STATION GALLERY



参考資料



江戸の景色はいかがですか？

にゃんこさん

休館日

月曜日

「四月二十九日、五月六日、六月一七日は開館」、  
五月七日(火)

開館時間

一〇時～一八時(金曜日～二〇時)

\*入館は閉館三〇分前まで

入館料

未定

2024.4.27<sup>土</sup>—6.23<sup>日</sup>

# 江

江戸時代(1603~1868)、戦乱のない穏やかな世のなかとなったわが国では、各都市にて城下町などを中心に町並みが整備され、ここに暮らす人々は、さまざまな形で動物たちとかわりをもっていました。たとえば、犬や猫などを仲間とし、馬や牛などを暮らして役立て、珍しい動物を見世物として楽しみ、豊かな自然がある近郊では四季折々の鳥や虫を愛で、時には過剰ともいえる飼育ブームが起きたのです。動物の姿は、イメージからデザインモチーフへと昇華し、温かみのある郷土玩具や、精巧な工芸品を生み出してきました。ドブに多様性に富んだ「どうぶつ都市」ができあがっていたのです。**1877(明治10)**年に来日した米国の動物学者、エドワード・S・モースは、日本人が動物を親切に扱うことに驚きました。動物の名に「さん」付けをして親しみを込めて呼び、人力車の車夫は道に居座る犬や猫を避けて走っていると記しています。今も同ような場面が日本どこかで見られるのではないのでしょうか。本展では、江戸東京博物館の豊かな所蔵品のなかから、浮世絵、工芸品、染織などをテーマ毎に展示し、江戸・東京において人々は動物をどのようにとらえ、表現していたのかを俯瞰します。



①

## 見どころ 1 展覧会初出品のものから、常設展示でおなじみのあの資料まで

大規模改修工事のため休館中の江戸東京博物館には、61万点にも及ぶ膨大なコレクションがあります。その整理がすすむなか、本展では、江戸・東京という場において、動物と人とのかわりを示す作品や資料を、選りすぐってご紹介します。

## 見どころ 2 パリで高い関心を得た展覧会を、さらにパワーアップさせた内容

2022年11月よりフランスのバリ日本文化会館にて開館25周年を記念して「いきもの:江戸東京 動物たちとの暮らし」展が開催されました。この展覧会は、過去10年で開催したバリ日本文化会館での展覧会のなかで、3番目に多い来場者数を記録しました。本展はパリでは出品できなかった作品を加えた凱旋帰国展です。



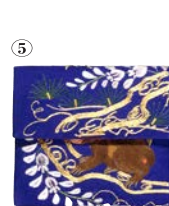
②



③



④



⑤



⑥

- ① 鶯会之図(屏風)江戸時代後期
- ② 歌川国芳(抱猿絵)みみづく文化9、万延元(1812~1816)年
- ③ 鈴木春信(蚊帳を吊る母子)明和末期(1770年頃)
- ④ 小島巖敬信(小金ヶ原脚鹿狩之図)部分、嘉永2(1849)年
- ⑤ 刺繍熊に猿図(懐中たばこ入れ)江戸時代
- ⑥ 夜着(孔雀模様)明治時代

\*会期中、展示替えをおこないます

東京ステーションギャラリー  
TOKYO STATION GALLERY



主催 東京ステーションギャラリー(公益財団法人東日本鉄道文化財団)、  
公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館、NHKプロモーション  
協賛 T&D保険グループ  
会場 東京ステーションギャラリー(JR東京駅 丸の内北口 改札前)  
〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-9-1 Tel.03-3212-2485 <https://www.ejrcf.or.jp/gallery/>

広報お問い合わせ先:東京ステーションギャラリー学芸室(羽鳥) Tel.03-3212-2763